

<翻刻> 『歌道聞書』 考

木藤, 才蔵

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文學誌要

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

52

(終了ページ / End Page)

57

(発行年 / Year)

1965-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019122>

『歌道聞書』考

木 藤 才 藏

歌道聞書は、神宮文庫蔵の近世初期の写本である。表紙の左隅上方に、歌道聞書と記してあるが、内容から言えば、連歌に関する聞書ともいべきものである。連歌の聞書を歌道聞書と題したのは、歌道の精神をもって連歌を詠み、歌と連歌の区別を認めなかった古風を範とすることにより、連歌を正道にかえすことができると思っていたためとも考えられる。その点について、本書の中にも、「其いにしへは、歌連歌わいだめなく、皆上にありたる事なれば、をのづから下に上手も出来けるにや。何事も公家の御指南を守り、歌道をしりけるとぞ。近代はただあやしものども、連歌は、わがものと思ひ、歌の道とは別にして、又一格ありと覚えて、次第次第に、わるびれたるものにぞ成行める」と述べている。

本書の構成についていえば、最初に、北山の奥に住む連歌愛好の僧が、古い連歌の感味をわきまえていると聞いて、二、三人で訪問して、次のような事を尋ねたという意味のまえがきがあり、ついで、客の問いに主人が答えるという形式で、問答が続けられ、最後に、右の老人の物語を、二、三人で手わけをして、徹夜で書き記したという意味の奥書を付してある。その後、「寛永十九年春季春之

日」とあるが、この寛永十九年をもって、本書の成立した年月と考えてさしつかえないであろう。

本書の内容について略述すると、まず、連歌の興廢について論じているが、そこには、菟玖波集の時代を上古、宗砌・心敬等の、いわゆる七賢時代を中古、宗祇の時代を当世とする見解が示されている。これに対して、客は、宗祇没後、現在まで二百年の歳月を経過し、その後、連歌の名手が多く輩出しているので、世人は、新撰菟玖波集時代を上古、宗牧・宗養の時代を中古、紹巴以後を当世と考えている。この通念に対して、宗祇の時代をもって当世とするのは、どういう理由によるのかと問う。主人はそれについて、次のように答えている。宗祇の道は、宗碩から宗牧へ、宗牧から宗養へと伝わったが、これらはすべて宗祇の風骨を伝えただけのものではなかった。宗祇の風を学ぶ者は、今日においても宗祇を師とするから、宗祇の時代をもって当世とするのだと。ところが、宗祇の道を伝えていた宗養は早死をしたために、連歌は事実上、ここで断絶した。宗養は長生きをしたならば、宗祇ほどの名人になつたらうと評判されていた人物である。紹巴も宗養の天分を認めていた。この紹巴は、周桂

や昌休に師事し、三条西公条に引き立てられた者であるが、石山千句の際には宗養も一座していたために、存分に腕をふるうことができたのであると。

客は、さらに問う。古風を知り道を仰ぎ宗養を崇敬していた紹巴の句に、宗養の面影を少しも留めていないのは、どうということなのかと。主人は、それに対して次のように答える。宗養在世の時分に紹巴の詠んだ連歌にくらべて、宗養没後の連歌は、格段に劣っている。これは、紹巴が自分の天分を知り、それに応じた句を詠んだためであるが、そのために連歌の句風は宗祇時代とは変わったものになった。この点については連歌の歴史をふりかえってみる必要があると云って、再び、南北朝時代以後の連歌の歴史について、略述している。その中で宗牧・宗養時代については、やや詳しく述べており、秀吉が天下を統一して以後の事に関しては、紹巴は連歌の普及につとめ、諸人に受け入れられるようにと、やすらかな句風を好んだということを中心にして、昌叱・玄仍・昌琢の句風にもふれ、古風に心を染むべきことを説いている。

ついで、客は、昌琢の連歌について主人の見解を問うが、主人はそれに対して、まともに答えず、昌琢の点をした三巻の連歌の発句を紹介して、その時代の句風は、この句から推測できるであろうというのみである。そして、このついでに「面白不思議なる物語申べし」といって、某国の侍何某が、ある夜の夢に、懐紙に記されていた、山に入ぬる墨染の袖という句を吟じていたところが、後ろに居た老翁が、此連歌、今の世の体也。返がへすあさまし。もし此句をすべからんには、暁のね覚にかへし墨の袖と有べきだと教えたかと思うと夢が覚めたという話を紹介する。そのあとに、「此境界を

案ずるに、紹巴此かた、連歌師といふものの、口より出べき事にあらず。住吉・玉津嶋・北野の御神も、古風に心を寄るものを、いとおしみたまひ、かかる事をも告させ給けるにや」という感想を述べている。

最後に客は、この頃、京都に流行している俳諧について質問する。それに対して、主人は、宗祇と宗鑑の唱和を引いて、当座の興を催すことは、昔から行なわれていたことや、俳諧の趣のだいたいについて説いて筆を置いている。

以上に述べた概要によって、本書の筆者の意図するところは、ほぼ明らかであろう。本書の筆者が述べたことは、連歌の道は宗祇によって完成され、その道統は宗碩・宗牧・宗養と伝えられて、宗養が早死したために断絶した。戦国末に至って紹巴が新しい句風を起こし、それ以後、紹巴の句風が支配的になったが、連歌において範とすべきは、宗祇の句風以外には存在しないということである。

本書の成立については、北山の奥に住む連歌愛好の僧を、同好の士が尋ねて、問答したことを、二、三人で手分けをして書き留めたのが本書であると述べている。しかし、筆者はあるいは、北山の奥に住む連歌愛好の僧その人ではないかとも考えられる。それは、「北山の奥深き林の一枝に巣くふ桑門有。名もなく芸もなければ、しれる人なし云々」というような、まえ書きの記し方のうちに、何となく感ぜられる。それはとにかく、この連歌愛好の僧が何人であるか、本書の筆者が何人であるかについては、不明というほかはない。

奥書にある寛永十九年という年は、連歌史の上では、大きな転換期にあたっていたように思われる。その六年前の寛永十三年には、

近世初期における連歌界の中心的存在であり、俳諧師の間にも一目置かれていた里村昌琢が六十三歳で没しており、その翌々年の寛永十五年には、紹巴の子の玄仲が、六十一歳で没している。紹巴の盛時を知る連歌師が次第に影をひそめ、連歌界の中心勢力が交替するとともに、連歌の句風にも、大きな変化を生じつつあった時代である。その点について、元祿六年（一六九三）に刊行された連歌破邪顯正の記事は注目すべきであろう。

上古・中古・当代の連歌の風体ども、かはりもてこし体を見侍に、今ここに上古と申は、宗砌・智蒞・專順・心敬・賢盛・行助などの時分なるべし。中古といふは、宗祇・宗長・肖柏・兼載・宗碩などの時なるべし。其後、周桂・宗牧・宗養・昌休・紹巴・昌叱・昌琢・玄仲などの時分まで、其代により人につきて浅深こそは待るべけれ、此道の正風血脈は、ただ一道にしてかはる事あるべからず。件の好士達のひとりひとりの風体共を見侍るに、少づつのかはりはあるべけれ共、大むねただ一筋なるべし。然るに、昌琢・玄仲などの時分の風体を見聞待りに、いかにも正風を第一とせられけると見え侍る。しかるに、此好士達の後五十年ばかり此かた、連歌の風体大にかはり侍ると見ゆ。其根源を尋待るに、いかなる人々の異見にか、件の好士達の連歌の風体を見、其時分の懐紙共を見て、ただつねさまの事ばかりにて、めづらしくかはりたるふしもなく、ただあさあさとすがた詞うつくしく花やかにして実なしと心得、いかさまにも風情をあらため、連歌を手あつく実のあるやうにたくましくせんとの意趣にや。それより此かた、風体めづらしくかはり来ると見え侍る。

この連歌破邪顯正に見える連歌の時代区分は、七賢時代を上古、宗祇と同時代および、その直門の時代を中古、周桂・宗牧以後を当代と見なしている点で、本書の時代区分と相違している。次に、連歌破邪顯正では、昌琢・玄仲の時代までは正風を第一として、この道の血脈は変わらなかつたが、それ以後五十年の間に、句風が大きく変化したといっている。その点で、紹巴以後に句風が変わつたという本書の記述と相違するわけである。連歌破邪顯正の著者が、紹巴以前と以後の間に、どの程度の句風の変化を、認めていたかははっきりしないが、その間の変化は、一応「少づゝのかはりはあるべけれ共、大むねただ一筋なるべし」という中に含まれるわけである。それに対して、昌琢・玄仲以前と、それ以後との間には、大きな句風の変化を認めている。したがって、その変化の大きさにくらべれば、紹巴以前とそれ以後の句風の変化は、ほとんど問題にならないと考えていたようにも受けとれるのである。それはとにかくとして、本書は、連歌の盛時が過去のものとなり、連歌の句風が大きく変化しようとしている時点において書かれた。その頃、従来の句風に行きづまりを感じ始めていた連歌師たちの間に、ようやく新しい句風を求めての模索が開始されつつあったように思うのである。本書の筆者は、宗祇にかえることよつてこの局面を打開しようとしたのであろうか。しかし、連歌破邪顯正の記すところによれば、それ以後の連歌界の趨勢は、本書の筆者の意図したところからは、ますます遠ざかってしまったように思われる。どうして、そういう事態を招来したかは、はっきりわからないが、俳諧の流行とその影響という要因も見落とせないように思うのである。

本書には、宗祇の隅田川（吾妻問答）宗長の連歌比況集、菟玖波

集、新撰菟玖波集などの連歌書の名が見え、古い時代の連歌の動向については、それらの書によって記しているように見える。ところが、宗牧・宗養・紹巴などに関する記述は比較的詳しく、現存している連歌書には見えないような内容も記されている。それらの内容の中には逸話に類するような記事も含まれているので、本書の一部分は、連歌師の間に語り伝えられている伝承をもとにして書かれていることも否定できないように思う。しかし、連歌の懐紙類や句集の類、あるいは連歌師の著作をもとにして書いていることも事実である。たとえば、「宗牧関東へ下りけるに、東海道の城々にて、不残興行ありたるとぞ。(中略)それより小田原北条殿にて、度たび連歌あり。関東中の城々にても、無残所興行ありし也。宗牧の書をかかれたるもの、発句のとめなどにて見侍し事共也」とある部分などは、宗牧の著作と発句の留帳によって、その動静を後づけていることを、はっきりと明記している。そして、文中にいう「宗牧の書をかかれたるもの」が、宗牧の東国紀行を意味することは、本書の内容とつき合わせてみると、はっきりするのである。このように、確実な資料によって記されていることが明らかな部分は、それほど多くはないが、確証の見出せない部分でも、その内容は、ほぼ信用してよいもののようにである。

本書の記述が、宗牧・宗養・紹巴に関して、比較的詳しいことは先にもふれたところであるが、同じく詳しく書かれているにしても、宗牧と宗養や紹巴の記述の仕方の上には、いくぶんの相違が感ぜられるようである。それは、宗牧に関するところは、主として、その著作や句集をもとにして記してあるのに対して、宗養や紹巴に関するところは、懐紙や句集の詞書のほか、彼等に面接した人々の直談

などに資料をあおいでいるためではないかと考えられる。しかも宗養に関する話は、主として紹巴の口を通して伝えられたもののようにであり、紹巴に関する話は、紹巴自身か、あるいは紹巴を知悉している何人かから直接入手したのではないかと考えられるふしがある。

この書では、宗養を非常に高く評価しているが、細川幽齋の口述したことを、烏丸光広が筆記して一書となした耳底記には、

宗養ほどなる連歌師、もいできまじきなり。連歌あひよかりしなり。(下略)

宗養ほど、連歌をくり返し案じたる人はなかりしが、又速くせんとおもふ時は、執筆のふでもひかぬに、はやあそこにありたると見えてありしなり。(下略)

などが見えていて、幽齋も宗養をたいへん高く評価していたことを知ることができる。また、宗養の時代まで古風を存し、紹巴以後句風が変わったということは、島津忠夫氏が「連歌固定への道―紹巴をめぐって―」(国語国文、昭和31・8)において論ぜられたことであった。その所論は大阪天満宮の社家で、多くの連歌書を写している大足軒長松が、書写のついでに記している覚書をもとにしたものであった。島津氏もいわれるように、われわれには、紹巴以前の作品と以後の作品の相違を、それほど明らかに識別する事が出来なくなっているが、数多くの連歌作品を読み、かつ自らも実作していた近世の人々には、それが明らかに指摘できたものと思う。島津氏が紹介された例をみても、その事は首肯できるのであって、たとえば、昌休・宗養・寿慶の何路三吟の後に、筆者の長松が、「此百韻古風残りて、当時のよき手本なるべし」といい、また、昌琢前後の連歌を写した「連歌拾四卷」の後に、「此連歌どもをみるに、

宗祇法師の時代に百とせあまり後なれど、いにしへのさまうせはて、紹巴法眼このかたの風調なるべきか云々」などと記しているのをみると、作品を通してだけの判断で、紹巴以前と以後の句風の相違するをはっきり感じとっていることが、よくわかるのである。そして、紹巴以後の句風の特徴を、宗祇時代の作風に比して、

「させるふしもなくただおだやかに安らかなる」風体として把握しているようである。大足軒長松は、近世末期の人であるが、本書の記すところも、紹巴以前と以後の相違に関しては、長松とだいたいの同じ見解をとっているとみてよい。したがって、本書に記す、紹巴をもって連歌史における一時期を画する存在であると見なす見解は、近世末期の連歌愛好者の覚書によって、決して、特殊の見解でないことがわかるのである。連歌初心抄の末尾には、幕末の連歌師阪昌成の説を、その子の昌功が略述しているが、その中にも、「此宗養は天性妙処を得て、祇公の風骨、是迄は連綿とうせざりしと称美せられたりしかども、これより風体替るべきにやと世の人愁へけるとぞ」というような記述が見られるから、本書に説くところは、連歌の句風の推移を、歴史的に後づけてきている人々の間では、常識的な見解であったと考えることもできるのである。

紹巴以後に連歌の句風が変わっていったことに関して、本書では、次のような事情をしるしている。宗養の生前には、紹巴はその影響のもとに句作していたが、宗養没後には、紹巴は自己の天分を自覚して、独自の句風をうち出した。秀吉が天下を統一した後、諸大名を初めとして、天下の人士は、連歌・茶の湯のような風雅な遊びに関心を持つようになった。この時に当って、紹巴は、天下の人士を、連歌の道に引きいれるために、まず、自分自身、やすらかな

句風を好み、深く案ずることを嫌った。この句風が多くの人々に受け入れられた。昌叱や心前は、深い境地を望んで及ばなかったが、紹巴は、深い境地の及びがたいことを知っていて、初めから、これを望まなかった。かくして、紹巴の句風が一世を風靡するに至ったのであると。

この説明は、中世末期から近世初期にわたる連歌の史的展開を考える者に、重要な示唆を与えているように思われる。紹巴が平易な句風の句を詠んだことに関して、戴恩記に、「又有時、紹巴の御句ばかりをぬき書にせんと申せしかば、其事無用なり。今よき句は有べからず。我もわかき時はふかく案じつるが、いまは毎日ある会、たゞやりやうのみこゝろにかけて、案ずる事これなし。若書ぬかんと思はば、打越より書て給はれ」と記しているのによって、紹巴は極めて多忙であったから、じゅうぶんに沈思する事が出来ず、結果として古風とは異なった句風になったというような事も考えられないことはない。しかし、それは紹巴の句風が一般に迎えられたから多忙になったのであり、多忙になったために、多作の傾向に一層拍車をかけることになったと解すべきであろう。

この紹巴の句風の特徴が具体的には、どういうところにあるかについては、ここでは詳しくふれない。この点に関して、前記島津氏の論文や、斎藤義光氏「紹巴連歌の特質―貞門俳諧の先蹤として―」（『国語と国文学』昭和32・9）や、両角倉一氏「紹巴連歌試考―二つの千句を中心に―」（『国語と国文学』昭37・3）などの論文が、極めて豊かな示唆を与えてくれていることだけを記しておくにとどめる。ここで特に指摘しておきたいことは、中世詩としての連歌が、近世に迎えられるためには、やはりある程度の自己変革を必要

としたのではなからうかということである。そして、紹巴による句風の変化も、中世期から近世初期にかけて芽生えてきた新しい世代の要望に沿うことによって、実現していったと考えられるということである。その点で、本書の次の記述は、注目に価するであろう。

かりにも深き事を嫌、いと浅くとのみ導ければ、天下に連歌という物は、つたはりけるなり。連歌の上品を論ずる時は、宗養迄にて、其後断絶也。若たすけて論ずる時は、紹巴が此工夫なからましかば、今時連歌ありとも知待らんや。

連歌を誰にでも享受できる気楽な文学に仕立てかえたために、連歌は今日まで存続することができたというのである。紹巴連歌の評価については、こういう見解も成立するのであって、筆者の立場からすれば、連歌の正風は、宗養で断絶したことになるが、紹巴が連歌史の上で演じている役割の一面については、決して、これを見落としてはいけないのである。

このように見てくると、本書の作者は、中世末期以降の連歌界の動勢に通じていたばかりでなく、時勢の動きを見通すことのできる史眼を持った人物であったということが出来る。その点では、本書の筆者として、連歌を愛好した一流の人物を想定すべきだと思ふ。本書の内容を見ると、近世初期まで在世の連歌師としては、紹巴のほか、昌叱・玄仍・昌琢について、その行迹や句風を叙している。このうち、昌叱・玄仍は、慶長年間に没しているが、昌琢は寛永十三年に六十三歳で没しているから、本書の筆者と、ほぼ同時代の人物である。ところが、本書においては、昌琢が連歌界の中心的存在となり、世人はすべて、その風を学ぶことになったという事述べながら、自分は近年世間から疎遠になって、その句に接しない

から、多分上手であろうと思うばかりだといって、その句風にはふれていない。そして再度の質問に対して、昌琢の加点をした三巻の発句を掲げて、「如此にて候。是にても、その時の風儀は、はかり知事に候。委事は不存事候」と記しているだけである。この文面を、そのまま受け取れば、本書の筆者としては、慶長から元和ごろまで活躍して、それ以後、連歌の交わりを止めてしまった隠士を想定することができるのである。しかし、一世を風靡した昌琢の句風にふれなかったというのは、少し合点のいかないことである。昌琢の句風にふれなかったという事は、昌琢と深い関係にある人物であったためだとも考えられる。それに、連歌の歴史を記すに当って、北野奉行のことをやや詳しく記しているところを見ると、その方面に関心があった人かも知れない。このような条件だけから作者を想定すると、若年の折に、里村昌琢から連歌の手ほどきを受け、主家没落後上京して、後に大阪の天満宮連歌所の宗匠になった西山宗因なども、候補者の一人にあげることができるかも知れない。しかし、宗因の著作と本書とは、どうも文体の上で相当の相違があるようである。結局本書の作者に関しては、不明というほかはないのである。